

人魚 平忠盛

## あみにかかった人魚 古今著聞集より

伊勢の国の別保というところへ、平忠盛が出かけた時のお話です。

別保の浜では毎日のように漁が行われていました。

ある日のことです。忠盛が、そこを通りかかると漁師たちが騒いでいます。

「見たこともないものがあみにかかったぞ」

「なんや、人のように見えるぞ」

「いや、猿のような顔じゃ」

たしかに頭は人のようですが、魚のような細かい歯があり、口のとがった横顔は、猿に似ています。しかし、体は普通の魚です。

2人の漁師が恐る恐る背負って運ぼうとしましたが、尾の部分はまだ地面に引きずるほどの長さがあります。

その上、近づいていくと悲しそうにうめき声を上げ、人のように涙まで流すのです。

さすがに漁師たちも驚いて、3匹取れたうちの2匹を「忠盛さま、どうぞお受け取りを」と差し出しました。ところがそれを見た忠盛は

「これは何たるものか」と、恐れおののいて漁師に反してきました。

漁師のもとにもどされた魚は、みんなにわけてあたえられました。

漁師たちが勇気を出してたべてみると、たたりや、具合が悪くなることもなく、とても味がよいので取り合うようにして食べたということです。

人々は、「人魚というのは、このようなものか」と長く語り伝えました。